

俳誌「風花」同人・須田英子（≡伊澤みゆき・濱野雪・伊東英子）と世田谷

福田 委千代

A Haiku Poet Hideko Suda (1890-1973)  
and the Magazine *Kazahana*

Ichiyo Fukuda

Abstract

*Kazahana* (discontinued), first published in May 1947, was a haiku magazine initially presided over by Teijo Nakamura (1900-1988). The issuing office was located in the residence of Teijo Nakamura in Daita, and the haiku meetings were held at the 9th branch of the Setagaya ward office near Shimokitazawa Station, hence the journals activities were closely connected to Setagaya.

Hideko Suda was affiliated with *Kazahana* as a haiku poet in her later years. But in her early days she had contributed to various literary magazines as a minor writer: short novels for girls in *Shojogaho*, short novels in *Seito*, and short novels and essays in *Shojochi*, etc. under the pseudonyms “Miyuki Izawa,” “Yuki Hamano,” and “Hideko Ito.” Focusing on her work for *Kazahana*, this article looks at her life and describes how she was involved in haiku as a self-sufficient resident of Setagaya ward.

Key words: Hideko Suda (須田英子), Teijo Nakamura (中村汀女), haiku (俳句), *Kazahana* (「風花」), self-sufficient life in Setagaya (世田谷での自適な暮らし)

はじめに

大正初期の「少女画報」(明治四五年創刊、東京社)誌上で、読者から熱い支持を受けていた少女小説家に、伊澤みゆきがいる。彼女については、父の富次郎が、教育者の伊沢修二と政治家の伊沢多喜男の兄弟であること、六歳下の妹きみ子が宇野浩二の恋人であったこと以外はよく分からなかったが、近年、岡本正貴氏・永瀨朋枝氏によって、この伊澤みゆきが「処女地」<sup>(1)</sup>「赤い鳥」の伊東英子であること、「青鞥」<sup>(2)</sup>の濱野雪とも同一人物であることが明らかにされ、森本稜氏の伊澤きみ子調査<sup>(2)</sup>によって具体的な家族構成なども判ってきた。

本名は伊澤英子(戸籍上は「ひで」<sup>(3)</sup>)、明治二三年一月一五日に仙台市に生まれたが、やがて一家は東京下谷竹町に転居、父母はその地で医院を開業した。一〇代の終わりごろから本名で雑誌投稿を始め、やがて創刊したばかりの「少女画報」に「みゆき(女)」の筆名で読切の少女小説を掲載するようになる。「伊澤」の姓を明かしたのは、「濱野雪」名義で「青鞥」に小説を発表しはじめた後の、大正四年に入ってからのことであったが、英子の名は伏せて「伊澤みゆき」としていた。英子が本名で作品を発表す

るのは、ロシア文学の翻訳等で知られる伊東六郎と結婚し「伊東英子」となった後の大正八年からで、「三田文学」「内外時論」「少女俱樂部」などに単発的な掲載がある他に、「赤い鳥」に童話が五篇、島崎藤村主宰「処女地」には同人として参加し第三号から終刊第一一号まで連続して小説またはエッセイを発表している。しかし、大正一三年に、伊東と別れ当時キネマ旬報社に関わっていた須田鐘太と再婚したことがきっかけで「伊東英子」の名は封印され、以降「濱野ゆき」名義で「婦人公論」「若草」などに昭和初期まで散発的な掲載がある。戦中の活動の有無は判っていないが、戦後は中村汀女主宰「風花」同人であったことが、親族から寄せられた情報として永瀨朋枝氏から公表されている。<sup>(5)</sup>

俳句同人誌「風花」は、昭和二年五月に世田谷区で創刊された。発行所の風花書房は汀女の住む代田に置かれ、同人も世田谷区内に住む人が少なくなかった。また、運営・発行が軌道に乗って後の例会は、下北沢駅最寄りの世田谷区役所第九出張所が会場とされており、世田谷には深い縁がある。

「風花」はまた多くの支部を誇ったが、本部周辺の主な支部には北沢・永福町・目黒・碑文谷の四箇所があった。このうちの永福町支部山吹会に、本名の須田英子で参加するところから、英子は句作の道に入ったようである。<sup>(6)</sup> 山吹会が立ったのは昭和二六年のことで、当時、英子は夫とともに永福寺にほど近い町内に住んでいた。が、昭和三〇年四月に夫が病没すると、世田谷区世田谷に転居したことが、昭和三二年五月刊『風花同人句集 第一巻』（風花同人会）に記された住所から判明する。

大きな業績のある作家ではない。しかし、その少女小説は吉屋信子に影響を与え、先輩作家の小寺（尾島）菊子からも「名文家」と褒められて

いる。<sup>(8)</sup> 曰く言い難い魅力をもつ書き手であることは、切れぎれではあったにしても発表の場を持ちつづけたことそれ自体が、また伊澤みゆき・濱野雪・伊東英子のいずれにも論考や言及があったことが、証明していると言えよう。夫亡きあと、それまでの住居を処分して決然と一人暮らしに入り、その日常を淡々と句にしたための姿勢にも、大いに惹かれるものがある。本稿では、「風花」における英子の活動を追い、世田谷区民でもあった晩年に、彼女がどのように文学と関わっていたかについて述べたい。

### 一、英子の句

俳句研究社刊「俳句研究」昭和三三年一月号掲載の「結社席〈風花〉」には、「風花編集部記」として同人数が「百数十名に達してゐる」こと、同人会長・佐藤十雲、副会長・小宮平堂を筆頭に、速水草女・岩下ゆう二ら主力同人の尽力によって東京以外の山口・熊本・秋田・新潟でも支部が結成・運営されていること、十周年を迎え「豪華な同人句集」（引用者註・前掲『風花同人句集 第一巻』のこと）の刊行などが報告されている。

（前略）風花作家の句風は男女の別を問はず一本のはつきりした線に貫かれてゐる。それは先生の指導方針である「その日その日の風の中にある己にふれる詩情をくみとる」と云ふ事である。心新しく居れば、あたへられるものは無限である事を汀女先生は教へつゞけて来られた。

このような方針の下には、「家庭婦人の同人が多」く集まっていることが記され、「風花の中堅層をなして風花同人欄である毎月の「四季抄」を飾り、風花作家に対する大きな影響力をなし」且つ「東京を中心として多数の支部を運営し、作品の錬磨、後進の育成に当つてゐる」として、二二

名の女性作家の句が紹介されている。中江百合・村田八重・樺島政尾・内海千鶴・手塚鶴代といった支部幹事らに続き、六番目に挙げられているのが須田英子の次の句である。

くさめしてとぼんとしたる小犬かな

これは「風花」昭和三〇年三月号の「風花集」に採られた一句である。「風花集」は、同じく汀女選ではあるが、先述の同人欄「四季抄」より一段下の掲載欄である。しかし、この句は前掲『風花同人句集 第一巻』収録の英子の句集「花八っ手」にも採られている。『風花同人句集』は、「各自選により数十句を抜萃し之に汀女先生の御選を経て二十句として編まれたもの」（佐藤十雲「跋」）とあり、英子の「花八っ手」二十句は、最初から七句までが愛犬を詠んだ句だった。このように、英子には愛犬にまつわる句が多く、犬の句は彼女を個性付けるものであったと言えよう。「子を持たぬ私はいつも身近に犬を置いた。犬というものゝ限らない可愛さは、飼った事のない人達には絶対に理解して貰へぬと信じる」（「ひとりごと」）、「風花」昭和三二年四月号「春扇集」より）と、英子は述べている。



「風花」昭和30年3月号  
(昭和女子大学図書館近代文庫蔵)

表紙は花森安治。  
この号に「嘘してとぼんとしたる小犬かな」が初出。

須田英子が「風花」に初めて登場するのは昭和二六年一月号、おそらく次の句にてである。<sup>(10)</sup>

秋草のうす紫の花ばかり

英子はこのとき六一歳、夫の鐘太とともに杉並区永福町に住んでいたが、ここに同年三月<sup>(11)</sup>「風花」永福町支部山吹会が立った。例会が週末ではなく毎月第二火曜午後二時から<sup>(12)</sup>となっていることから、参加者が専業主婦中心であったことが知れる。発足時の幹事は内海千鶴（子）であったが程なく大阪転居となり、同じ永福町内に住む同人たちの樺島政尾・手塚鶴代が新幹事となった。山吹会が五周年を迎えた際には、「支部めぐり（五）山吹会（永福町支部）」という記事に「地元の永福町古参組が四、五名受附、会計で、早くから出席して下さるのが何よりの強味で、ナマケモノの私などはいつも鶴代さんの蔭に隠れて、適当にごまかしてゐてもさほど目立たぬ程繁昌してゐます」（「風花」昭和三二年五月号）と、幹事の手塚鶴代に続いて短文を載せていることから、英子も「永福町古参組」の一人であったことが知れる。余談ながら手塚鶴代は、大正一四年「婦人世界」懸賞小説一等当選作となった「葡萄実れど」の作者でもある。<sup>(13)</sup>そのことを英子は知っていたのだろうか。逆に、手塚鶴代は英子を知っていたのだろうか。若き日の文学的野心について、二人ともに語り合ったことなどはなかったか——気になるところである。

話を戻すと、先の「秋草」の句は、永福町山吹会例会で採られ巻末の句会報に掲げられたもので、「風花」本編への掲載作ではない。語の選択が何とはなしに大正のむかしの少女小説を思わせて懐かしいものの、独自性は弱い。「おそろく私は私の死ぬその日まで、下手は下手なりに句を作り

つづけてゆく事だらう」「ひとりごと」という言葉は輜晦でもあろうが、初手から才能あふれる作者でなかったことは英子自身も自覚していたと見てよいだろう。

とはいえ、翌月号には「一つづつ拾ふ木の実のみな濡れて」が、早くも本編「風花集」に取上げられた。翌二七年は「風花」自体の発行数も七冊と少ないが、英子の名は二・三月合併号以降、句会報ばかりでなく「風花集」にも見え、句作が日常化してゆくさまが見て取れる。その中には、前述したように犬の句が目立って多い。

犬の句を追ってゆくと、飼主の感じる「限りない可愛さ」の情とともに、「その日その日の風」、即ち日常に、英子が味わったであろう喜怒哀楽も浮かびあがる。

犬跳んでわれもまた跳ぶ春の水（昭和二七年七月号）

逃げし犬探し歩けば梅雨の蝶（昭和二八年九月号）

今年また犬を死なせて秋に入る（同一月号）

早春の掌にのるほどの仔犬買ふ（昭和二九年四月号）

日盛りの仔犬は重し焦げくさし（同八月号）

犬との散歩が日課だったのだろう、「犬跳んで」の句は英子になお潜む少女らしさと同時に、旧神田上水に縁どられて水の豊かな永福町の容子も伝わってくる。永福町で最後に飼っていたのは「三太」という名の「秋田またぎ犬」だった（「句のあとさき」、「風花」昭和三十一年一月号）。前掲「くさめして」の句に詠まれたのも、月日から推してこの三太であろう。

ここまで引用した犬の句はすべて「風花集」に採られたものだった。英子の句が初めて「四季抄」の方に採られたのは、昭和二八年一月号の

「鶏頭」と題された次の四句である。

月澄むや船ことさらに黒く立ち

鶏頭は燃え病院に人絶えず

病院を出でつまづける露の石

子の泣きて病院早き秋の暮

三句が病院をモチーフにしているが、翌月号「風花集」には「秋雨の暗き外科医の長廊下」という句があり、翌二九年四月号には「今日抜糸春雪眉をかすめ飛ぶ」が同じく「風花集」に採られている。英子本人は若かりし頃から自身の「常に病弱な体」（「迷へるもの」、「処女地」大正二一年八月号）に悩まされていた<sup>(14)</sup>ようだが、ここに詠まれた病状はおそらく夫・須田鐘太のことではないかと思われる。鐘太は肝臓癌で約一年半後に亡くなっている。石に躓く姿に英子の受けた衝撃の深さが表れているとすれば、烈しく動揺する自己を客観的に捉え得たそこに、表現者としての英子の前進もあつたということになるだろうか。

## 二、中村汀女との関係

「風花」を通覧してみると、汀女と英子は思いの外親しかったような印象を受ける。

昭和三十一年の「風花」一月号には、同人会吟行の上野応挙館庭園での集合写真が巻頭に掲げられており、「英子」と記された人物は汀女の向かってすぐ左後ろに立っている。同人物は、翌二月号巻頭の新年風花例会の集合写真では最前列、汀女の向かって右隣に座している。英子の名を持つ人物は「風花」中他にもいたが、いずれの写真もうつっているのはただ一人、

見たところの年頃も合っている。おそらくこれが、須田英子本人の姿であろうと思う。

汀女は毎号、巻頭に新作を掲載していたが、その中には「風花」にまつわる体験記録のようなものもある。たとえば昭和一九年一月号には、「鶴鶴」と題した中に、「八重、英子、貞子等大阪に千鶴子をたづね／芦屋支部の人たちにも逢ひたしと発つ。」という詞書が記されている。

前述したとおり、永福町支部の初代幹事・内海千鶴子はこの年に大阪へ転居したが、転居先でも大阪支部幹事となって活躍していた。それを同人とともに汀女が見舞ったのだが、同行者の中に英子の名がある。苗字が記されていないので確実ではないながら、村田八重は北沢支部の、山田貞子は浅草支部のそれぞれ幹事であった。「英子」の名で、汀女に名指しされるほどの有力同人は他にはなく、彼女のこの時期の掲載句からは同時期に京阪方面に出でいたらしいことも知れる<sup>(15)</sup>。が、英子は表向きは永福町支部の一員でしかなく、作品もまだ「四季抄」と「風花集」のあいだで揺れ動いていた。

英子がこの時期の汀女にとって、特別な印象があったらしいことは、英子の夫・須田鐘太の死に際して、汀女が次のような句を贈っていることからも知れる。

夫君を亡くされし須田英子氏に

涼やかに語られし日とのみ思ふ

狭庭今日如露の横向き夏に入る

これは「風花」昭和三〇年五月号の巻頭「夕焼空」の一部として掲載されている。配偶者の死は誰にとっても他人事ではなく、句そのものも個人

が特定されるような内容ではないが、「須田英子氏に」と詞書にあるのは重い。「風花」にとって、英子はどのような同人であったとみるべきなのだろうか。

明治三三年生まれの汀女は、英子とはちょうど一〇歳ちがいである。英子が伊澤みゆきの名で「少女画報」に少女小説を掲載していた大正元年から五年のあいだは、汀女がまさしく少女雑誌の読者層である女学生だった時期に相当する。「風花」はまた創刊時から富本一枝が編集者であり、初期には平塚らいてうが本名の明子で登場するなど、「青鞥」関係者とも縁が深かった。その背景には「成城という文化人や資産家が集う新しい住宅地が舞台として存在して」おり、そこには汀女をはじめ戦時中から「買い出しや疎開を通じて交流を深めていた」女性文化人たちの姿があることを、中山修一氏が「中村汀女没後三〇年にあたって 汀女主宰誌『風花』創刊前後の人間群像<sup>(16)</sup>」で述べている。そういった女性たちのネットワークがある中で、須田英子が「青鞥」後期に関わった濱野雪であることは、まるで知られていない事実だったのか。おそらくそんなこともあるまいと思われのだが、事実は判らない。

「風花」には創刊以来「風花集」という掲載欄があったが、昭和二八年三・四月合併号からは実力や貢献度に優れる同人たちの句を載せる「四季抄」という欄が登場する。英子が「風花集」よりもこの「四季抄」の方に定着するのは昭和三〇年以降のことであるが、前年二九年後半には句ばかりでなく、同人同士の近況等を知らせ合う通信欄や句会報告にも文章を寄せ、さりげなく存在感を示している。そうした文章の中には、初代中村吉右衛門が同年九月に亡くなったのを受けて、少女時代の想い出を記したものがあつた（「風花通信」昭和二九年一月号）。これなどは伊澤みゆき・濱野

雪・伊東英子いずれのペンネームにおいても書かれた演芸をテーマにした小説や批評が、どのようなきっかけから生じていたかを明かすものともなっており、興味深い。曰く、父が「非常に」芝居好きであり、幼い頃から俳優の楽屋に出入りするほどであったという。吉右衛門を偲んで、通信の末には「その午後の楽屋のれんの秋の風」という句を掲げている。

このように存在感を増していた英子について、大津希水が同年八月号の「風花集」に採られた「濡れてゐる那智黒石や夏桔梗」の句を取り上げ、翌九月号の同人句評で次のように述べている。

那智黒石に桔梗を配した事は、趣向の点に於ても、配色の点に於ても、つきすぎてかなりの冒険である。それにもかゝらず破綻を見せてゐないのは、黒石に対して桔梗の「紫」の文字を伏せた事、夏の桔梗である涼感、「濡れてゐる」と焦点をしばつた事等の手腕に負ふ処大であるが、何と云つても句のまとまりを動かないものにしたのは、濡れた那智石を名に呼んで愛する趣味の深さにあるであらう（「風花集句評」、傍点引用者）

翌昭和三〇年一月号の、これもまだ「風花集」掲載ながら、「風立ちぬ小鹿の角の不揃ひに」という句に對し、初めて汀女が「選後評」に取り上げている。「物音におどろきやすい動物のやさしい瞳が、こちらをひたと向いてゐる。「風立ちぬ」と、冷たい風は目に見えて、其処に起り、その風よりも早い変化を小鹿の表情に見つけて、それがそのまゝ作者の心の驕となつたのである。見れば、やうやく伸び出た角の凸凹の、ぶざまさに、秋寂びの思ひを深くせず居れないといふ多感の旅人の、心のメモの一つ。」（傍点引用者）とあり、汀女もやはり希水と同様、英子の特徴をその感性に見出している。

「風花」掲載句は、毎月の句会や投句の時期とは二か月ほど時差があるが、四月に夫を失つたこの年、英子の句は六月号のみ未掲載だけで、あとは一・三・一〇月号を除いてすべて「四季抄」掲載だった。「今年は活躍しましたね」と、汀女は一二月号掲載の「座談会 風花の人々（第二回）」で、英子のことを評価している。「須田さんはご主人を亡くされたけれど、その嘆きを決して動哭を以つて表していない。それでいて、悲しみは溢れている。奥床しいです。人間が出来ているんですね」と述べる汀女に続いて、座談会参加者の佐藤脩一が引いているのが、

秋風やひとりのくらし吹きぬけに  
いささかの風もかばひて門火焚く  
の二句である。

「嘆き」を「慟哭を以つて表していない」そこに、汀女は年長世代の「奥床し」さを見た。が、それは英子にとって幼少期からの宿痾ともいえる「片意地」であつたことが、次のような文章から理解されてくる。

いったい私はこどもの頃から、とても強情で鼻ツ柱が強く、その上陽気であけすけな、のんき坊主で通つて来た。そして自分もまたそのやうに振舞つて来た。けれどほんとはむしろその反対なのである。それをどういふものか一生懸命にひた隠しに隠して来た。たゞ、自分の弱味をひとに知られたくない、愚痴や涙は絶対ひとに見せまい。何事にせよ、ひとに憐れまれるほど自分に我慢のならない事はない——かういふつまらないとも言へば言はれる一種の片意地が、こどもの頃からずっと私を引摺つて来たのだと思ふ。これが果して私にとって幸福であつたかどうか、この頃しみぐと振り返つて見るや

うになった。もつと正直になれ、裸になれと自分で言つて見る。一つの開眼でもあらうか。／やせがまん身につきにける懐手／これではあまり寂しすぎよう。(「ひとりごと」)

そう言う側から、英子は「私は一周忌をすませたら、住慣れたこの家を引払つて、さゝやかなアパート住居を初める事に決意した」と続ける。

もとよりひとりである。周囲のひとぐは皆案じてくれるけれど、自分は案外平気である。勿論寂しくないとは言はぬけれど、でも人間は元来孤独な筈ではなからうか。私はそれに慣れて行くだらうし、亦慣れて行ける自信は持たたい。過去にまつはる一切のうるさいものを投捨て、幾許かの本と、良人の絵と、茶器の少しと、小鳥籠と、あとはほんの身の廻りものだけ持つて、実にさゝやかな生活をして行かうと思ふ。それはどんなにせい／＼する事だらう、ひとりきりの自由と夢が、私の余生をきつと豊かにしてくれるだらう。

(同右)

英子のこの「片意地」は、本人の性質や生活上のものだけのことではないと、私は考えている。たとえば、伊澤みゆき名義で発表した少女小説には、親や愛する友から捨てられるより先に、こちらから相手を振り切ろうとするヒロインの姿がしばしば描かれる。<sup>(1)</sup>彼女たちにとっては事実がどうであろうと重要ではない。それより、自分がどのように感じるかが問題なのである。捨てられるより先にこちらから捨てようとするそこには、傷つくのを極端に恐れる感じやすい神経と、もとより愛情深い素地とがある。それ——即ち「片意地」は、決してマイナスなものではなく、寧ろ伊澤みゆきのみならず、濱野雪の、伊東英子の、文学をも特徴づける個性であっ

たように思われる。そして、その個性は、当然ながら俳句作品にも映じていると思うのである。

昭和三十一年一月号の「風花」に選ばれた句で、あなたのもつとも会心の作と、その句の思ひ出をおきかせ下さい。」というアンケート「句のとさき」に、英子も答えている。「あのひとこのひと無事賀状積む」という前年の正月風景を詠んだ句を選び、「それが三十年に亘る私の結婚生活の、最後のお正月になつた——」と述べた後、英子は次のように続ける。

だがしかし、私は決して不幸ではない。今私は汀女先生を初め句のお友達皆様の限らない温情につままれて、苦しいけれども亦それだけ楽しい、句作の途を一心に歩んでゐるのである。

アンケートは「もつとも会心の作」についてであるが、英子はさいごにもう一句を記す。

悔なしと言ひ放ちたる秋扇

扇がどれほど美しかろうと懐かしかりうと、新たな季節になれば手放して悔いなしという英子の思考、生き方は、いっそ清々しい。そして面白いのが、「会心の作」であるはずのこの二句とも、『風花同人句集 第一巻』の二〇句には採られていないことである。最初から外されていたのか、汀女が採らなかつたのか。いずれにせよ、入れられていないそのことにも、英子の「片意地」が生きているように思われる。

### 三、世田谷の英子

永福町の家を引き払い、英子が引っ越したのは、世田谷五丁目自在の「世

田ヶ谷温泉荘」というアパートであった。この新住所は、前掲の『風花同人句集 第一巻』と、「俳句研究」昭和三年四月号巻末附録「全国俳句結社同人録Ⅲ」に記載されている。世田谷五丁目は今では桜丘と地名を変えているが、千歳船橋駅からすぐ、現在の二丁目にある稲森神社南側のあたりが、英子の「ひとりのくらし」の場所であったようだ。「引越の荷もさくやかに濃山吹」という句が昭和三年六月号「四季抄」に見えるが、この句は前月巻末の「風花句会」四月例会報に初出しており、実際には夫の一周忌を待たずして転居した可能性もある。

昭和三年に入って英子は完全に「四季抄」に定着し、前掲「句のあとさき」「ひとりごと」などの他に、「主婦と俳句（座談会）」<sup>(18)</sup>に名を連ねていたり、五月に五周年を迎えた永福町山吹会について一文を寄せたりしている（前掲）。英子は、前年までは本部の風花句会にはあまり参加していた容子が無いのだが、この年は山吹会だけでなく風花句会や成城支部秋草会など他の例会や、吟行にも積極的に参加している様が見える。——じつは、英子は転居に際して飼犬三太を手離していた。アパートでは飼えぬから、という理由であるが、そこにはやはり幾許かの「片意地」が見え隠れするようにも思う。夫亡きあと、愛犬も手離した上での転居、一人住まいとなって、「あの悲しみのどん底にゐた時も、俳句だけが実に私の心の支へであった」（「ひとりごと」と述べているとおり、句作は英子を生かす動力となっていたことが判る。そのような姿勢は、他の同人の注視するところともなった。

七月号の「四季抄鑑賞」で、同人の村田脩が、前掲の「濃山吹」の句とともに「犬のこと聞かずときめて明易き」（「四季抄」六月号）を取り上げて、「我々も負けてしまふやうな真面目な取り組み方だと思ふ。一人の人

間の生活なりに、真剣さが生きる上にも作る上にも一つになっているのであろう」と評している。

このまま順調に俳人としての人生を歩むかに見えた矢先、昭和三年一月号を境に、英子は「風花」の表舞台から姿を消す。句会報には時折「英子」の名が見えるが、本人であるか、名前の同じ他者の作であるかは判らない。この年「風花」は創刊一〇周年を迎える。「十周年特別号」となった五月号掲載の大会名簿には、英子の名前も確かに記載されており、巻頭に掲げられた椿山荘での大会写真には、集合写真のみならず、汀女と前後してにこやかに歩く英子の姿も記録されている。しかし、大会入選句にある句が英子のものであるかどうかは判然としない。この年、英子の作と特定できる句はわずかに一句、「丹念に足袋の吊糸揃へ干す」があるのみである。<sup>(19)</sup>

英子はなぜ、「風花」に距離を置くようになったのか。一〇月号の「句のあとさきアンケート」に、その答えと言える理由が認められてある。

（略）私は何も彼も彼もが懶くなり、あれほど打込んでいた俳句に対する情熱さえもすつかり萎んでしまった。何故だろうか？ 私は知っている、それはどうしようもない女の宿命みたいなものである。心の痛手は時が癒してくれるという、だが又時を経るほど深くなり行く疵痕もある。所詮女というものは何かを愛さねば生きてゆけない業を担って生れたらしい。良人と弟を一時に失い、次には犬とも離れねばならなかった私の孤独さが、遂に茲まで追詰めて来たのだ。私は黙ってひとりでおとなしく坐っている。どうぞ今暫く私をそつとしてをいて下さい、何時の日か、私はもう一度戸外へ出て行けるかも知れない——（冬の雲）

この告白に従うなら、前年の英子の活躍ぶりは一種の躁状態であり、その反動が襲ってきたのだと言うことができよう。「常に病弱な体」が、最愛の夫を亡くした喪失感に耐えられなかったことも考えられる。<sup>(20)</sup>ただ、この反動はひとえに英子の内部に蓄積されたものから発したというだけでなく、外的な要因もあったように思う。

世田谷での新生活の一端を、英子は次のような句に仕立てていた。

端居してとなりの窓の児をあやす（昭和三十一年八月号）

アパートのみな気を揃へ青すだれ（同右）

衣紋竹ひとつ吊せば事足りぬ（同年九月号）

ちょうど同時期の八・九・一〇月号にかけて、「風花」誌上では、A・B・Cという匿名評者による「四季抄句評」という座談会が、渡辺均の署名のもと連続三回で掲載されている。<sup>(21)</sup>その第二回に、英子の前掲「端居して」の句が取り上げられた。「B」の評者が「句の出来は別として僕はこの句から多分に庶民的な体臭と云つたものを感じ」る、「抒情とか閑雅等は残念乍らみられない」ため「見落されやすいと思ふ」と言ったのに対し、意見を求められた「C」は、

確かにこの句には市井の主婦の生活と云ふものが出てゐますね。だけどその体臭は一種の長屋的なもので、あまりに安易すぎないかしら。同一作者の、／＼アパートのみな気を揃へ青簾／＼これなども前と同じことが云へると思ふんです。

と述べ、「この安易さは私嫌いです」と切り捨てている。

この第二回は冒頭から、「四季抄より風花集の方が全体的にみて作品が上廻つてゐる様に思」うとか、「四季抄は総体的に年齢も風花集作家より

上」なところに「作品としても、安易になりやすくなつて仕舞ふのかも知れない」といった、「四季抄」作家に対する批判的な姿勢を打ち出しているので、匿名の評者たちはおそらく比較的若い世代の有力同人であったのだろうと思われる。

次の第三回にも英子の句に対して評がなされているが、少しトーンが変わる。

B 先月号でしたか、私が英子さんの句を庶民的でいゝと云ひましたが。今月も、／＼衣紋竹ひとつ吊せば事足りぬ 英子／＼うす／＼御家庭のことをきいて知つてゐる私には、心憎いまでうまく詠まれてゐると思ふのですか。

C 簡素な生活がよく出てゐますね。押しつけていなくて、それでいてひとりの生活の侘しさがにじみ出てゐます。俳句のよさつてこんなところにあるのかも知れませんね。

英子が、これら同人たちの批評を気にしたかどうか、それは判らない。ただ、「片意地」者の彼女をへこませたものがあるとするれば、それは「うす／＼御家庭のことをきいて知つてゐる私には、心憎いまでうまく詠まれてゐる」「ひとりの生活の侘しさがにじみ出てゐます」といった立ち入った言葉ではなかったか、と思うのである。「どうぞ今暫く私をそつとしてをいて下さい」（「冬の雲」）という英子の嘆願には、文学表現であることを越えてまで個人の生活や内面を推し量るようなことは、して欲しくないと、そのような心が訴えられているのかも知れない。

同人同士のあいだに世代間ギャップがあることはその後も話題になった。「風花」昭和三十一年一月号掲載の「支部消息」として、永福町山吹会以下、東京・神奈川の主立った支部会幹事が集まり、汀女を囲んでそれぞれの活

動状況を報告する座談会が掲載されているが、ここで山吹会幹事の手塚鶴代が、「お年寄りの方の句が、一つでも余計に入選して欲しい」、その理由として若い人は入選しないとすぐやめてしまうが、年配者は決してそんなことはないからだ、と述べると、戸塚支部の宇佐美ふき子が、支部にいる年配者に対し、「批評会で、若い方達が、こんな句は、といつて、散々にたたくんです。それで、ノイローゼぎみになってしまつて……」と続け、汀女から「批評をし合うのもよいけれど、お互いを無視してはいけませんね」と忠告されている。単に世代間の問題ではなく、文学に対する姿勢とも関係し、俳句同人誌というものの難しさが伝わりくるやりとりである。

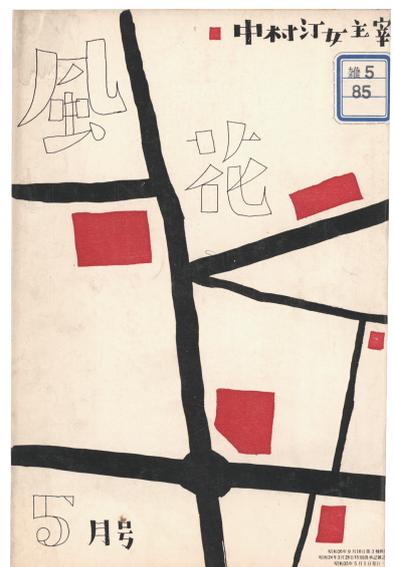
奇しくもこの座談会が載った号を区切りに、英子は「風花」と距離をおく生活に入った。<sup>(22)</sup>句作もこれきりかと思われた。が、昭和三五年、熊本・江津湖畔に汀女の句碑が建立される。その除幕式・懇親会の容子が「風花」五月号に報告されているが、出席者名簿には英子の名が見え、会場スナップには汀女の脇で微笑むその姿が確かめられる。句碑建立を祝しての「寄せ書」と題されたページには、英子の今が綴られている。「(略)私は茲三四年遠ざかっていた俳句への郷愁が、一度に馳戻つてくるのを感じた足踏み、後戻り、一步前進、それでも私はいゝと思う。私は今ほんとうに楽しいのです」——祝賀句会には次の三句が採られている。

菜の花や雲はしづかに夜を誘ふ

新樹蔭深き奥庭句碑除幕

朝窓に雨後の若葉の色重ね

生きる上でのさまざまのことを抱えては放ちしながら、今を自適に生きる英子の姿が、これらの句には写し出されていないだろうか。



「風花」昭和35年5月号  
(昭和女子大学図書館近代文庫蔵)

「菜の花や」以下…英子久々の三句が掲載された。

再び「四季抄」に英子の名が載るまでには、さらに二年ほど待たねばならなかった。「四季抄」は「十周年特別号」昭和三二年五月号を以て「I」に分割されていたが、久しぶりの英子の句は昭和三七年二月号上の「四季抄II」の方に見出せる。それ以降の掲載はごくわずかで、英子の関心は同人活動から離れ、自らの感性が掻き立てられたときのみ句を投じていたようであるが、昭和四三年七月号の「小河内ダム」と題された五句が、最後の「四季抄」掲載である。

ところで、英子の夫は生前、大映取締役であった。「過去にまつはる一切のうるさいものを投捨て、幾許かの本と、良人の絵と、茶器の少しと、小鳥籠と、あとはほんの身の廻りものだけ持つて、実にさゝやかな生活をして行かうと思ふ」(「ひとりごと」と述べての世田谷への転居は、だから英子にとって「大映取締役夫人」という仰々しい肩書との決別を意味したかも知れない。終の棲家となり得たかどうかは分からないが、世田谷は英子にとって「ひとりきりの自由と夢」(「ひとりごと」)の実現を目指し、選

ばれた地であった、と一先ずは考えることが出来よう。肩書と云えば、昭和四〇年、愛知の美術工芸家・藤井達吉の業績を記念して出版された『孤高の芸術家 藤井達吉翁』<sup>(23)</sup>(昭和四〇年八月、丸善株式会社)に、「思い出のかずかず」という一文を英子が寄せている。藤井翁に英子は「昭和の始めごろ」に面識を得たと書いているから、再婚後、濱野ゆきのペンネームで「若草」などに作品を散発的に発表していた頃のことである。どういった経緯からの面会であったか、文章からは分からない。が、終わり近くに「ときどきへたな俳句をお目にかけては、俳句などやめて和歌にするよう、皮肉まじりにおっしゃった先生のお顔をふと目に浮べる」とあるところから、二人のあいだには文学的なやりとりがあったことが知れる。「梅咲いて墓石あたたか南向き」という自作の句も掲げてあるが、実を明かせばこれは、夫・鐘太の一周忌に捧げられた一句である。藤井翁の亡くなった昭和三九年は英子自身も体調不良だったとあるが、懐かしい男たちはみな彼女を残して旅立っていった。この句は、そういう事実に対する英子の感慨を浮き立たせる、大事な一句になっていたのではないだろうか。一文の末尾には、「元大映多摩川撮影所長夫人」という肩書が記されている。亡くなった夫の肩書で呼ばれる——呼ばれざるを得ない自分を、晩年の英子はどうのように捉えていただろうか。尤も、「ひとりきりの自由と夢」とは、案外こうした肩書の背後でこそ、のんびりと養えたものかも知れない。

昭和四八年七月二〇日、須田英子は八三歳でこの世を去った。「風花」にはそのことは触れられていない。ただ、同年一一・一二月合併号の「後記」には、「また親しい句友のなん人かとも永別いたしました」と、汀女が記している。

※テキストは引用に際して新字体に改め、ルビは基本的に省略した。但し、伊澤みゆきの「伊澤」姓に関しては旧字体そのままとした。

(註)

- (1) 岡本正貴「伊東英子をさがせ その1〜e」〔aazorablog〕<https://www.aazora.gr.jp/aazorablog/?p=836,835,985> 平成二四年八月一〇日・一三日・一八日、閲覧日令和二年八月一日)、永瀧朋枝「藤村発行「処女地」に執筆した〈無名〉の女性達——伊東英子・林真珠——」〔神女大國文〕平成二七年三月)、永瀧朋枝「「処女地」の伊東英子「凍った唇」——別名：「少女画報」の伊澤みゆき・「青鞥」の濱野雪——」〔国語国文〕平成二七年八月)
- (2) 森本穂「宇野浩二評伝ノート⑩伊澤きみ子の親族たち」〔文芸日女道〕平成三〇年四月号)
- (3) 註(2)に同じ。
- (4) 生没年、結婚等は、岡本正貴「伊東英子をさがせ その1〜3」(註(1)前掲)で明らかにされている。
- (5) 永瀧朋枝「「処女地」の伊東英子「凍った唇」——別名：「少女画報」の伊澤みゆき・「青鞥」の濱野雪——」(註(1)前掲)による。なお、澤みゆき・「青鞥」の濱野雪——(註(1)前掲)の「付記」による。なお、永瀧氏の英子に関する論は、『無名作家から見る日本近代文学——島崎藤村と「処女地」の女性達——』(令和二年三月、和泉書院)に収められている。
- (6) 「風花」昭和三二年四月号「春扇集」と題された同人の近況報告集に掲載された須田英子「ひとりごと」に、「私が汀女先生のお弟子に加へていたゞいてからや、つと、四年余り、まだく／＼ほんのかけだしで、五里霧中で歳時記と取組んでゐるにすぎない」(傍点引用者)とある。
- (7) 吉屋信子は「一流の女性作家となるには 巣立つ日に備えて(Ⅱ)」(少女の友「昭和二四年四月号」と「想い出の少女時代——女医になりたかった私」(少女の友「昭和二六年一〇月号」)に二度にわたって伊澤みゆきに憧れ目指したことを語っているが、これは註(5)に既に指摘がある他、久米依子「大正期少女雑誌から婦人雑誌への位相——伊東英子の軌跡を視座と

して——」(東京大学国語国文学会「国語と国文学」平成二九年五月特集号)にも同様の指摘がある。

(8) 小寺菊子「現代の若き女流作家」(『中央文学』大正九年六月)

(9) 岩見照代「伊東英子「凍った唇」解説」(『女性文学会編『女性文学の近代』双文社出版、平成六年四月)、永瀨朋枝「藤村『処女地』に執筆した無名の女性達・目録」(『神女大國文』平成一九年三月)、福田季千代「少女小説の系譜——『少女画報』と伊澤みゆき——」(『学苑』平成二三年九月)、らいてう研究会編『『青鞥』人物事典——110人の群像——』(大修館書店、平成一三年五月)

(10) 「英子」という作者名はこれ以前から支部会報に見られるが、この句は永福町支部山吹会初出であり、且つ成城支部秋草会『秋草会句集』(昭和三三年六月)中の英子の句集「青田風」に収められており、英子の作と特定できる、現在のところ最初の句である。

(11) 「支部めぐり(五) 山吹会(永福町支部)」「(『風花』昭和三一年五月号)の手塚鶴代記「会は今から丁度満五年前の昭和廿六年の三月半ばに誕生致しました」による。「風花」巻末句会報に「永福町支部山吹会」報が初掲載となるのは昭和二六年八月号からである。

(12) 「風花」昭和二八年八月号奥付から北沢・永福町・碑文谷の支部句会の日時が記されるようになる。永福町のみ平日昼間で、本部と他の二支部は土日の開催である。

(13) 公益財団法人山人会ホームページ「山人会の会員で会った人々／主な物故会員の氏名と略歴」欄(<http://www1.odn.ne.jp/sanjinkai/syoukai/kaini/teata.html>)、閲覧日令和二年八月一日)及びリンク先「手塚鶴代」(無署名「会員の横顔」1957年(昭和32年)山人会報3号より)(<http://www1.odn.ne.jp/sanjinkai/syoukai/yokogao/yokogao11.html>)、閲覧日同日)に、「東山梨郡春日居村出身。師範学校を卒業して暫く小学校の先生をやっていた」が、結婚後に「有名だった婦人世界の懸賞小説に応募「葡萄実れど」という長篇小説が見事1等に当選して、みんなをアッとさせた」、「中村汀女門下の四天王の1人として、俳諧で活躍」と紹介されている。

(14) 濱野雪名義の随筆「七月末の日記より」(『青鞥』大正四年九月)に既に、同様の傾向が語られている。

(15) 「風花」昭和二九年二月号「風花集」には「秋夕焼明日はひとりの旅となる」以下三句とも旅が詠まれ、巻末「永福町山吹会」十一月例会報には英子の名で「旅重ね京の時雨に逢ひ別れ」の句が採られている。

(16) NPO法人くまもと文化振興会発行「総合文化誌「KUMAMOTO」」平成三〇年九月

(17) 伊澤みゆき「闇に居て」「捨犬」「美智さま参る」(いずれも大正三年の作)など。なお、みゆき作品の特徴については拙稿「少女小説の系譜——『少女画報』と伊澤みゆき——」(註(9)前掲)を参照されたい。

(18) 「風花」昭和三二年一月号。出席者は汀女・須田英子・村田八重・赤塚喜美重・井上美子・村上淑子・編集部となっている。

(19) 「風花」昭和三二年二月号「成城支部秋草会」句会報にあるこの句は、註(10)に示した『秋草会句集』に収録されており、英子の作と特定できる。

(20) 前掲「冬の雲」には、「昨年の初冬であつた。ふと病みついて寝たきりというでもなしに、はかばかしくない毎日を過ごしていた頃」とある。

(21) 匿名による句評座談は一月・二月合併号にも持ち越されるが、ここでは大津希水の署名で「四季抄鑑賞」とタイトルが変わり、参加者はA・Bの二名のみである。このことからおそらく渡辺と大津の二名はこの句評に関わっていたことが推察される。

(22) 巻末の支部句会報には、その後も「英子」の名が永福町支部山吹会以外の句会に散見される。山吹会は昭和三年に「風花婦人句会」に発展継承となった。

(23) 編者は愛知県総合芸術研究会長・愛知県副知事(当時)の松尾信資となっている。本書に英子が寄稿していることは、註(1)(4)に示した岡本正貴氏によって判明したものである。

(ふくだ いちよ 日本語日本文学科准教授・近代文化研究所員研究員)